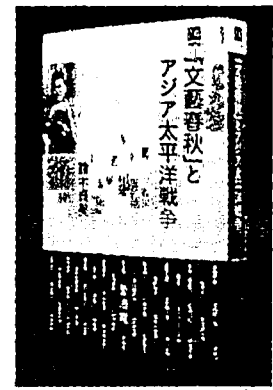


「戦争協力者」菊池寛の「文芸春秋」

近年、第2次世界大戦中の論壇や政策の再考が進んでいる。日本近現代文芸史が専門の鈴木貞美・国際日本文化研究センター教授は、著書「『文芸春秋』とアジア太平洋戦争」で、「戦争協力者」として戦後に非難された菊池寛を中心に当時の言論界を分析。「言論統制下でも多様な主張が展開されていた。『戦中』とひとくくりにせず、国内外の情勢の変化に注目して読み解く必要がある」と語る。



「『文芸春秋』とアジア太平洋戦争」

鈴木教授によると、菊池はもともと「中道」を掲げて右翼も左翼も取り込んだ総合雑誌を目指していた。文芸春秋1937年9月号の雑感録「話の肩籠」で、菊池は「北支において、日支が戦端を開いたことは遺憾である」と盧溝橋事件を批判している。非共産党系マルクス主義の労働派で反ファシズムの論客山川均の原稿を掲載したり、言論統制への抗議も折に触れ展開した。

鈴木 貞美 日文研教授 新著で分析

鷹内閣のブレインの哲学者三木清による「東亜協同体」論の先駆的な記事などを掲載し、国際連盟を脱退し孤立した日本への理解を国外に求めた。

こうした動きから「菊池は、言論の自由を守り文芸家の社会地位の向上を図りつつ、出版社の経営と両立させようとしていた」とみている。

その後、菊池は真珠湾攻撃を機に積極的に総動員態勢を

言論統制下でも多様な主張



「『あの戦争』とひとくくりの思考では、当時の実像を正確に読み解けない」と語る日文研の鈴木貞美教授（京都市中京区・京都新聞社）

盧溝橋事件を批判／山川均の原稿掲載

支持する。戦後、GHQは「文芸春秋が日本の侵略戦争に指導的立場をとった」として、菊池を公職追放した。鈴木教授は「菊池は『大東亜戦争』に協力したが、日中戦争拡大には反対した。戦争期の知識人の思想は、協力が非協力か『ファシズムかデモクラシーか』などの図式で読み解けない」と、戦後に定着した菊池たちの人物評を疑問視する。

著書では、一世代若い小林秀雄や河上徹太郎、林房雄らが編集し、文芸春秋の傘下に入った文芸誌「文学界」グループにも焦点を当てた。小林らがそれぞれ異なる視点で戦争をとらえ、かかわっていく過程を検証。著述や座談会の記録から、厳しさを増す言論統制下で間接的な批判を試みたり、建前と本音を使い分けていたことを確かめた。

鈴木教授は「時々刻々と変化する国内外の情勢を念頭に検証すれば、戦争の早期終結や、暴走する軍部を少しでも理性的にしたいという彼らの願いが見える」と指摘する。

近年、東アジアの20世紀を再考する機運が日中韓の研究の間で高まり、「満州国」で発行された雑誌の共同研究などが進む。ドイツでもユーラシア大陸という枠組みで歴史の見直しが始まっている。「冷戦構造が崩壊して約20年。左翼対右翼といった従来の尺度がゆらぐ今だからこそ、客観的かつ冷静に分析できる」。

武田ランダムハウスジャパン刊、2310円。

（芦田恭彦）